

ふれあう心

ボランティア活動感想文集



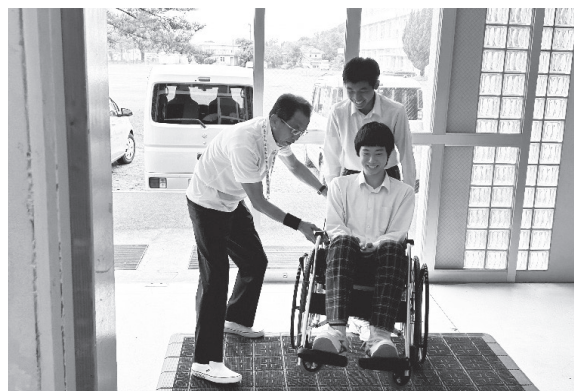
中学生高齢者疑似体験学習



小学生ボランティア学習教室



高校生ワークキャンプ



中学生車いす体験学習

社会福祉法人 いちき串木野市社会福祉協議会

いちき串木野市ボランティアセンター

あなたらしく 笑顔で暮らせる 福祉のまちづくり
～よりそう、ささえあう、つながる～

令和8年2月

「ボランティア育成事業協力校」とは

児童・生徒の社会福祉への理解と関心を高め、児童・生徒を通じて家庭・地域社会における福祉意識を高めるために、市立小中学校 15 校を「ボランティア育成事業協力校」として全校指定し、各学校でボランティア活動に取り組んでいただいています。

ボランティア活動文集「ふれあう心」には、この活動に関するものの一部が記載されています。

この他、例年 3 月に行われるボランティアフェスタにて、活動発表やパネル展示を行い、みなさんのボランティア意識の向上に取り組んでおります。



なお、一連の事業には「赤い羽根共同募金」の支援を受けております。

今後とも、ボランティアへの取り組み、赤い羽根共同募金活動にご理解、ご協力を宜しくお願い致します。

はじめに

市内公立小・中学校全十五校においては、ボランティア育成事業協力校として、日頃から多岐にわたってボランティア活動を推進していただき、深く感謝申し上げます。

各小中学校児童・生徒が学校や施設、地域において、自分たちができるボランティアに取り組んだことを編集したものが、このボランティア活動の感想文集「ふれあう心」です。

これまで続けてきた活動を基盤とした「やりがい」、地域で活動したことで、地域や住民の方と繋がって得た「幸福感」、またそれを広げていきたいという「意志」が書かれており、あらためてボランティアについて考えるきっかけとなり得る文集となっています。

いちき串木野市ボランティアセンターとしては、この文集が多くの方の手から手へと渡ること、作者が考えるボランティアに共感が得られ、広がっていくこと、また、児童・生徒の皆さんには今後変わらず、ボランティア活動を続けて頂き、いちき串木野市にボランティアの輪が広がっていくことを願っています。

最後に、この文集の発行にあたりご指導くださいました、各学校の先生方、活動においてご協力頂いたボランティアの方々に厚く御礼申し上げます。

令和八年 二月

目次

小学校

○「朝の光と空のペットボトル」	串木野小学校	四年	峯元理央	1
○「認知症キッズサポーター」	串木野小学校	四年	宮之原なつめ	2
○「ビーチクリーン」	照島小学校	五年	柏原結心	3
○「ぼくの学校のAKB作戦」	照島小学校	五年	黒木秀一	4
○「手話を使つて話したい」	羽島小学校	四年	池満大騎	5
○「羽島の海を守る活動を通して」	羽島小学校	五年	森力也	6
○「今ぼくにできることは」	旭小学校	五年	大久保遥真	7
○「初めての子ども食堂」	旭小学校	五年	山崎怜香	8
○「みんなの大切な町のために」	生福小学校	三年	木ノ下萱央	10
○「今年のクリーン作戦は」	生福小学校	五年	中島咲夢	11
○「たのしかったボランティア」	荒川小学校	二年	林みよる	12
○「ボランティアを通じて感じたこと」	荒川小学校	五年	大崎陽葵	13
○「ボランティアの本当の目的」	市来小学校	六年	坂口司	14
○「ボランティアって何だろう」	市来小学校	六年	町田一晟	15

中学校

○「にん知しようになつても」	川上小学校	四年	上迫田光莉	16
○「ボランティアが教えてくれたこと」	川上小学校	五年	川地未紗	17
○「はじめてのクリーンさくせん」	神村学園初等部	一年	おおくば えみ	18
○「環境委員会の仕事を通して」	神村学園初等部	五年	泉智花	19
○「ボランティアの目的」	串木野中学校	三年	北蘭隼也	20
○「ボランティアの意義」	串木野中学校	三年	中野友葵	21
○「誰かのためにできること」	串木野中学校	三年	池田樹里	22
○「西中のボランティア」	串木野西中学校	三年	西川友稀	23
○「羽島をきれいに心もきれいに」	羽島中学校	二年	赤岩路唯	24
○「伝えたい気持ち、届いた「ありがとう」」	羽島中学校	二年	黒木悠依	25
○「ありがとう、私の学校」	生冠中学校	三年	東美未	26
○「今までの活動を振り返って」	生冠中学校	三年	吉木歩花	27
○「ボランティアについて」	市来中学校	三年	内田あかり	28
○「松寿園訪問を通して」	市来中学校	三年	浜田真子	30

○「ボランティア活動を経て学んだこと」

神村学園中等部 三年

室屋潤奈 31

○「感謝の気持ちを伝えること」

神村学園中等部 三年

池田琉壺 32

高校

○「愛の奉仕に触れて」

串木野高等学校 二年

坂口暁暉 33

○「ワークキャンプを終えて」

串木野高等学校 二年

大六野瑠花 34

○「ワークキャンプで学んだこと」

串木野高等学校 三年

中村温仁 35

朝の光と空のペットボトル

串木野小学校 四年 峯元 理央

「朝だよ、理央。起きなさい。リサイクルのお手伝いに行くんでしょ。」

父の声で目をさました。時こくは午前五時二十五分。まだねむい目をこすりながら、

「うん。おはよう。」

と言ってふとんから出た。今日は二週間に一度の地域リサイクル活動の日だ。

父と歩いて公民館へ向かった。空はまだ少し暗い。でも、朝の光が少しずつ広がっていた。公民館には、祖父母が待っててくれた。

「おはよう。」

と笑顔で声をかけてくれた。父はすぐに仕事へ向かったが、祖父母がいっしょにいてくれるので心強かった。

この活動に参加したきっかけは、四年生の社会の授業だ。ゴミのことを学び、夏休みの宿題で復習をしていた時、父にボランティア活動にきょう味があることを相談した。

「水曜日に地域のリサイクル活動があるよ。それに参加してみたら。その代わり早起きしないといけないよ。」

とすすめてくれた。一人で参加するのは、ちょっと心配だったので、祖父母にいっしょに参加してもらおうようお願いをした。

公民館では、ペットボトル、プラスチック容器、新聞紙などを分ける作業をしていた。近所のみち子さんが、

「ここにはプラスチックを、あっちには紙を置くのよ。」

とやさしく教えてくれた。周りは大人ばかりで、初めはドキドキしたけど、みんなの笑顔に助けられていつの間にか手がなれてきていた。一番多かったのはプラスチック容器。じりじりと太陽が照りつける中、青いネットにゴミを入れていくと、ネットと同じようにわたしの心のやさしさもふくらんでいくようだった。こんなにあ



るんだとびっくりしながら、自分が役立っていることにわくわくしていた。でも、やっぱり早起きはつらい。お腹はぺこぺこ、汗はポタポタ。そんな時、地域の方が、
「がんばってるね。朝早かったから、後でお昼ねをしてね。」と声をかけてくれた。そのやさしさにもうひとがんばりする力をもらった。

作業の合間、ふと思い出した。今朝、ここにくる途中、道ばたに空のペットボトルが落ちていたことを。これまではただのゴミだと思っていたけど、それも大切な資源なんだ。帰りに

拾って、洗ってリサイクルに出そうと決めた。

作業が終わるころ、急に大雨がふってきた。祖母がそっと傘をさし出して、

「よくがんばったね。」

と笑顔で言ってくれた。そのしゅん間、心がぽかぽかと温かくなった。

汗と笑顔と、空のペットボトル。小さな朝の活動が、わたしに大きな気づきをくれた。

認知症キッズサポーター

串木野小学校 四年 宮之原 なつめ

わたしは、七月三十日（水曜日）にお母さんと認知症キッズサポーターに行きました。なぜ行くことになったかというところある日わたしが、学校から帰ってきてくばられたプリントをつくえの上に出して、お母さんが仕事から帰ってきてプリントを讀み終わったときに、

「なつ、この七月三十日にある認知症キッズサポーターに行こうよ。」

とさそわれたので行ってみることにしました。場所は、市役所の防災センター二階の会議室で、認知症のことについて学びました。最初は、高齢者になったつもりでおも

りをつけたり、体をまげにくくするものをつけたりしました。次に、目や耳を見えにくく、聞こえにくくするもの、軍手をして新聞をめくってみるのもしました。軍手をする、けっこうめくりにくかったです。

そして認知症について学びました。なぜ認知症が起るかというと、アルツハイマー病で脳の細ぼうが死に、脳全体がちぢんでしまふからです。脳血管性認知症は脳血管がつまって一部の細ぼうが死んでしまいます。いちき串木野市

には二万五千人が住んでいます。その中で認知症になっている方は千五百人いることを知りました。最後に認知症になると起こることについて学びました。認知症になると何かを忘れてしまふことや場所がわからなくなることなどたくさんありました。

次に八月一日（金曜日）に高齢者の方がいる市来デイサービスセンターに行きました。最初にじこしようかいをして七夕かざりをおじいさん、おばあさんたちに配りました。わたしもねがいごとを書きました。「元気にくらせますように」とねがいを書いてかざりました。ささの葉をかざったときはと



でもきれいでした。最後にたいそうをしました。高齢者の方は足やうでが動かしにくいので、いすにすわったままできる運動をしました。おじいさん、おばあさんたち全員とあくしゅをして外に出ました。ポイントカードを見せながら写真にとつて家に帰りました。初めておじいさんおばあさんたちと長い時間お話しして楽しかったです。

この体験を通して、わたしは最初、脳の病気としか知らなかったけど、今ではなぜ認知症になるのか、認知症になるとどうなるのか、ということがわかるようになりました。しかも、高齢になると体がどう変化するのかやどんなに大変かも知ることができました。これからは、高齢者や認知症の人を見かけたら声をかけてみようかと思います。鹿児島島のばーばも最近、わすれものが多いのでお手伝いをたくさんしていきます。あと三回、体験に行きますが、おじいさん、おばあさんたちのためにがんばって行って少しでもよろこんでもらいたいです。

ビーチクリーン

照島小学校 五年 柏原 結心

わたしは、八月に、照島海岸で、ビーチクリーンのボランティアをしました。

ビーチクリーンというのは、海岸にあるゴミを拾ってきれい

にする活動です。家の近くの海岸を歩いていたときに、ゴミがとても目立っていて「なんでこんなにゴミが落ちているのだろう。」と思ったことがきっかけです。

わたしたちの学校では、照島海岸で行うサンドクラフト大会や砂浜持久走大会があります。その海岸に、空き缶やくつ、手ぶくろや発ぼうスチロールなどが落ちていて、とても悲しい思いをしました。特に、プラスチックのゴミが多く、ペットボトルや、砂に半分うまつたビニールぶくろ、小さなプラスチックのかけらがたくさんありました。

わたしはゴミを拾いながら、「どうしてこんなにゴミを捨てる人がいるのかな。」と不思議に思いました。中には、外国語で書いてあるペットボトルもあり、「外国のゴミも流れてくるんだ。」とおどろきました。海はつながっているから、外国からもゴミが流れてくるようです。

ゴミを拾っているときはかなり大変でした。しゃがんで小さなゴミを拾うと、風がふいて髪が顔にかかってじゃまになったり、砂が手ぶくろの中に入ってきたりしました。発ぼうスチロールは軽いけど大きくて、ゴミぶくろに入れるのはむずかしかったです。砂にう



もれている缶もありました。しゃがんだり立ったりをくり返すので足がつかれてきて、「もうやめたいな。」と少し思っただけど、それでもゴミぶくろにどんどんゴミがたまっていくと「海がきれいになってきた。」とうれしい気持ちになりました。

海はわたしが小さいころから遊んできた大好きな場所です。だから、海にきた人が「ゴミが多いな。」と思うより「きれいな海だな。」と思ってほしいです。

ビーチクリーンが終わったときに海を見ると「もっときれいにしたいな。」と思いました。少しきれいになったけどまだゴミは残っていました。だから、だれかに任せるのではなくこれからも続けていきたいです。みんなが少しずつゴミを拾ったり、ゴミを捨てなかつたりすれば、もっときれいになると思います。

今回のビーチクリーンで、ゴミを出さないことが大事だと感じました。拾っても、また捨てる人がいたら同じことのくり返しになってしまいます。だから、わたしはこれからゴミを捨てないで心に決めました。そしてまたビーチクリーンをして、大好きな海を守っていききたいです。

ぼくの学校のAKB作戦

照島小学校 五年 黒木 秀一

ぼくの学校では、学校のみんなで取り組んでいるものがあります。それはAKB作戦です。

Aは「あいさつ」です。曜日ごとに担当の学年が正門に立ち、元気よくあいさつをします。この時間は、学校の人以外の地いきの人にもすることがあります。

ぼくが学校に行くとき、時々九十才のおじいさんに会います。話すのははずかしいけど、元気よくあいさつをすると、おじいさんは

「気をつけてね。」

と見送ってくれます。このやり取りで、ぼくは「今日もがんばろう」と元氣が出ます。元氣よくあいさつをすることで、笑顔の輪が広がり、いちき串木野市全体が明るくなるのではないかと思います。

Kは「くつならべ」です。くつ箱のくつや、トイレのスリッパをならべます。そうじの時にくつ箱を見てみると、かかともきちんとそろっていたのでとてもいい気持ちになったことがあります。



また別の日には、友達がトイレのスリッパをならべているところを見ました。スリッパがならんでいると気持ちよくトイレを使うことができるので、スリッパがそろっていない時には、ぼくも進んでそろえていきたいです。そして学校の人々でくつならべをして、みんなが気持ちよくすごせる学校を目指していきたいです。

Bは「ボランティア」です。ぼくは朝の時間に事む室の前や保健室の前を下を友達といっしょにモップできれいにしています。みんなですると、よれがすぐに落ちるので、すっきりします。みんなで協力してそうじをすると、みるみる学校がきれいになっていくことを知りました。ぼくは友達と毎日ボランティアをしているので、これからも続けていき、どのくらいよれが落ちるのかを確かめたいです。他にも、ろう下の黒ずみを落とすなど、学校のすみずみまでよれが落ちるようにがんばりたいです。

このようにAKB作戦に取り組んでいると、学校で気持ちよく生活でき、心もきれいになることが分かりました。ぼくはこれまで、あいさつやくつならべ、ボランティアは、他者のためにすることだと思っていました。しかし、この三つをすること、自分の心もきれいになり、特にそうじが好きになったので、自分の成長につながるのだと思いました。

地しんなどの災害時に、ボランティアの人が活やくするニュースを見たことがあります。ボランティアの人が汗をかきながらも笑顔で活動していたことが印象に残っています。

ぼくも、困っている人がいたときに自分にできることがあれば進んでやってみたいと思います。

手話を使って話したい

羽島小学校 四年 池満 大騎

「はるちゃあん。」

母がよんだ。げつ、またお手伝いをたのまれるのか、と心の中で思った。

「手話教室に行ってきたくない。」

と母が言った。手話教室って何だろう。「手話」という言葉は聞いたことはあるが、何かは分からない。母が覚えてきてと言ったから、覚えなれないといけないものらしい。正直めんどうくさい。だけど母の言うことはぜったいだ。兄としぶしぶ手話教室に行くことにした。

夏休みになり、手話教室に参加するため高れい者福祉センターに行った。初めに手話をした。手話



とは耳の聞こえない人のために手を使って話をするものらしい。手を少し動かしたり、指を立てたり、手でいろいろな動きをして言葉を表す。名前、家族、あいさつの表し方を先生が教えてくれた。むずかしすぎて全然おぼえられなかった。動物の形を指で作る「きつね」という手話があった。これは前から知っている形だったので、すぐにおぼえられた。母とのやくそくを思いだし「おばあちゃん」という手話を必死におぼえた。人さし指でほつぺたをさわってから、小指を曲げて上下に動かす。帰ってからひろうすると

「すごいじゃん。」

とフェイスパックをした母が言った。わらっているのか分からなかったけど、声がうれしそうだった。ぼくもうれしくなった。

他にも車いすの乗り方とおし方を教えてもらった。

「みんなで乗ってみましょう。」

という先生の言葉に、転ばないか不安だったが乗ってみた。兄がおしてくれた。動かすのが速くてこわかった。いきおいでかべにぶつかりそうになり、とうとう

「もうちょっとおそくおして。」

と声を上げてしまった。そのあとはゆっくりおしてくれたので安心して乗っていられた。次はぼくがおす番だ。兄がこわくないようにゆっくりとおそうと思った。ドスンと兄がすわった。重くておせないんじゃないかと心配になった。案の定重くてびくともしない。ハンドルを持つ手にめちやくちやに力を入れておした。ゆっくりと動いた。動き出すとあまり力はいらなかった。

た。ただ、Uターンするときは思うところはいかない。かべにぶつかりそうになりあぶなかった。兄にも怒られてしまった。車いすをおすには練習が必要だ。

今回手話教室に参加して手話はおぼえることが多くて思った通りにむずかしかった。会話をするなんてもつとむずかしい。だけど、耳が聞こえない人とは手話がないと話せない。だから少しずつおぼえてみようと思う。そしていろいろな人たちと話をしてみたい。多くの人がおぼえたら、耳の聞こえない人も聞こえる人も関係なく話をするができるかもしれない。ぼくに知らないことをたくさん教えてくれた手話教室だった。

羽島の海を守る活動を通して

羽島小学校 五年 森 力也

毎年、羽島小学校では、海岸の清掃活動に取り組んでいます。今年も五月十三日に実しされました。

「海辺で遊ぼう」というみんなが楽しみにしている活動の前に、学校のみんなと、海上保安庁の方々、地いきの方々と一緒に海岸清掃に取り組みます。今年は、羽島中学校も参加して、一緒にごみ拾いをしました。

海上保安庁の方々が、ごみが海の生き物にどんなえいきょうをあたえるか、げきをして見せてくださいました。海の生き物

が、プラスチックごみを食べて苦しんだり、命があぶなくなったりするという内容のげきです。毎年いろいろな工夫をして見せてくださるので、「海をよごさないようにしよう」と考えさせられます。今年は、どれくらいのごみが落ちているのだろうと思います。ごみ拾いに入りました。

海岸に下りると、岩場にたくさんのごみが見えました。遠くから見るときれいに見えるけど、実際は、たくさんのごみが落ちていてぼくは、とても残念な気持ちになりました。マイクロプラスチックという小さなプラスチックごみやライター、ペットボトルやビンのかけらなど、ぼくが思っていた以上にたくさんのごみが落ちていました。一つ一つ手で拾っては、

「ここにもあった。今年も多いな。」
「言いながら、ごみ拾いをがんばりました。また、今年は中学生も一緒だったので、班を作りごみを分別しながら、ごみ拾いを進めていきました。」

「これはもえるごみだね。」
「もえないごみはこっちだよ。」

と、中学生や班のみんなと声をかけ合いながら、岩場を歩きました。ぼくが最初に想像していたよりもたくさんのごみが集まり、びっくりました。もし、魚やカメなど



の海の生き物たちが、ごみをエサとまちがえて食べてしまったら、本当に死んでしまうだろう、そう考えると、これではないなと思いました。ぼくたち人間が、「ポイ捨てをしない」「ごみが落ちていたら拾う」など、自分で考えて行動することが大事だと思います。

二十分ぐらいの海岸清掃でしたが、羽島小・中学校のみんなを取り組んだことで、羽島の海が少しでもきれいになったと思うと、ぼくもうれしくなりました。そして、ごみ拾いの後の海遊びが、とても気持ちよく楽しく感じられました。

さらに、今年は、この海岸清掃活動が表しようされ、羽島小のみんなでもよろびました。毎年この活動が続けてきてよかったなと思いました。ぼくは、これからも、羽島のきれいな海を守るために、海岸清掃に積極的に取り組んでいきたいと思っています。

今ぼくにできることは

旭小学校 五年 大久保 遥真

ぼくの学校では、週に二回、朝登校したら体育服に着がえて草取りなどをするボランティア活動があります。これまでしてきた活動の中で、一番大変だと思ったのは、駐車場側のそっこうのそうじでした。雨が降るとそっこうに土や石が流れてき

てたまり、水はけが悪くなってしまいます。そのままにしてしまうと、次の雨の時に校舎側に水があふれてしまうので、雨が上がった日に土や石を取り除くそうじをします。

「簡単でしょう、楽勝。」

と始める前は思っていました。けれど実際にやってみると、くさいにおいがするし、土は重たくて大きなスコップを使っても少しずつしかとれません。

「これは大変だ。本当にきれいにできるかな。」

と少しやる気がなくなっていました。それでも毎回みんなと協力してすこしずつ取り除いていくと、ようやく最後のさつこの底が見えてきました。

「やったあ。」

あきらめずに続けることができて嬉しい気持ちと同時に、

「ほくもがんばればできるんだ。」

と自信がついて、心まできれいにそうじできたようでした。

最近、大雨による災害がとも多いです。ニュースでどろをかき出すえいぞうを見て、あのさつこのにおいを思い出しました。そして、



「大事なものがあんなどろだらけになるなんて、ほくだったらつらいな。ほくになにかできることはないのかな？」
と想像していたら、テレビ画面の「ボランティア」の文字が目に入りました。

「これはボランティアの人たちなんだね。」

とほくが言うと、

「そうだよ。」

と母が返事をしました。きっとほくが思っているよりもすごく大変なことだと思うけれど、困っている人を助けたいし、ほくが反対の立場だったらとてもうれしいので、いつか災害ボランティア活動にも取り組んでみたいと思いました。

まず今ほくにできることは、学校を楽しく安全に過ごせるように、みんなのことを想いながら、これからもボランティア活動の時間を大事にしていくことだと思います。そして、だからのために行動する勇気を持てるようにがんばっていきたいです。

初めての子ども食堂

旭小学校 五年 山崎 怜香

「家の近くに子ども食堂があるよ。」

お母さんが言った。私は子ども食堂に行ったことがなかったの

で「行ってみたいな。」という気持ちと「私が行ってもいいのかな。」という気持ちが重なり合って、少し複雑な気持ちでした。

子ども食堂に入ってみると、思っていたよりもたくさん的小中学生がいた。

お兄ちゃんと座って待っていたら、調理員さんが、「こっちにおいで。」

と声をかけてくれた。二人でついて行くと、今日のごはんはカレーと柿、ヨーグルトだと教えていただいた。私は心の中で「おいしそう。」と言った。ごはんをもって席にもどった。

「いただきます。」

私とお兄ちゃんは言った。まず先にカレーを食べた。

「おいしい。」

今度は声に出して言った。はじめは「食べられるかな。」と心配していたが、その心配はすぐになくなった。調理員さんのやさしさと料理のおいしさで、デザートまであつという間に食べ終わった。

次の日も子ども食堂へ行った。その日のメニューはスパゲッティだった。この日はミートソースかペペロンチーノの二つの味で選べ



るようになっていた。私とお兄ちゃんはミートソースにした。「いただきます。」

一口食べたしゅんかん「おいしい。」と心の中でさげんだ。子ども達の好みに合わせて味も二種類用意してくれているなんて、すごくうれしかった。

この日行った子ども食堂は、食事だけでなく勉強もできて、わからないところがあつたら教えてもらえた。このときは夏休みだったので、毎日かよつて宿題をして、子ども食堂でご飯を食べた。

この夏休み、私は毎日子ども食堂へ行くようになった。その理由はご飯がおいしいのはもちろんだが、みんながやさしくとても楽しかったからだ。

私子ども食堂に楽しく行けたのは、ご飯を作ってくれる調理員さん、支えてくれるボランティアの方々や地域の人たち、施設の職員の方、それ以外にもたくさんの方が協力してくれたからだ。子ども食堂へ行ったことを通して、たくさんの方のやさしさで毎日安心して楽しく過ごしていることがわかった。

私はこれからも子ども食堂へ行ってみたいと思う。そして、いつかは私が子ども達に食事を準備したり勉強を見てあげられる日が来るといいなと思う。

みんなの大切な町のために

生福小学校 三年 木ノ下 萱央

「明日は、クリーン作せんです。」

帰りの会に先生からお話がありました。クリーン作せんは、学校の周りを歩いてごみをあつめる活動です。ぼくは、

「二年生や二年生のころは、あまりひろえなかったから、たくさんひろうぞ。」

と思いました。

次の日、クリーン作せんをする日になりました。まず、クリーン作せんをする前に、しっかりとじゅんぴをしました。ぐん手をはめて、火ばさみとビニールぶくろを持ちました。

学校を出て、ぼくたちは、大六野の方にむかってごみひろいをしました。ふだんは、きれいに見える通学路も、じっくり見わたしてみると、いろいろなごみが落ちていました。たとえば、たばこのすいがらやカラスのはねもありました。ブルーシートの切れはしも見つけて、びっくりしました。友だちのりょうまさんは、はだぎもひろっていました。ごみを入れるふ



くろが、風船のようにばんばんになってしまいました。ここは、毎日通っている道なのに、いつもとはちがう道に見えました。ぼくが、思っていたよりも、いろいろなしゅるいのごみがありました。三・四年生十三人でごみをひろいました。ごみは、ごろごろと見つかりました。

ガソリンスタンドの近くを通ったとき、いでさこさんが、「今日は、ごみひろいですか。がんばってくださいね。」

と、声をかけてくれました。ぼくは、いでさこさんの言葉で力が出てきました。いやだった気持ちがきえて、

「もうすこしがんばろう。」

と思えてきました。

学校につくと、みんなのふくろがばんばんでした。みんな、「つかれた。」

と言っていたけど、ぼくの心は、すっきりして気持ちよかったです。

ごみがあるということは、まだ、だれかが、「ポイすて」をしているからだと思います。一人一人が、ごみをすてないように気をつけたら、きっと、きれいな町になると思います。来年のクリーン作せんでは、今年よりもごみが、少なくなっているほしいです。ぼくも、家ぞくに今日の話を話してポイすてをしないようにしたいです。

今年のクリーン作戦は

生福小学校 五年 中島 咲夢

前回は、たばこが多かったです。前回というのは、わたしが四年生のときのクリーン作戦です。五年生でのクリーン作戦では、ゴミの量が減っているかもしれない。そんな期待をしていました。

今回は、ペットボトル、空きかん、それもビールの空きかんが多かったです。しかも、草むらにかくしたり、石のすき間に入れたりする人が多かったです。持って帰って家のゴミ箱に入れるだけなのだと思います。

帰っていると、わたしたちの目の前でハンバーガー屋さんのゴミを投げて捨てている人がいました。ありえなかったです。もし、動物たちがそのごみを食べてしまつて死んでしまつたら、捨てた人の責任です。自分が動物物だったら悲しいです。

わたしたちや地域のみなさんが、定期的にボランティアとしてゴミ拾いをやっています。それでも人が捨てるからひろつてもひろつてもきれいになりません。ク



リーン作戦をやつてる意味はあると思うけど、こんなにみんなが捨てるとあまり意味がないんじゃないかなと思つてしまつて、やる気がなくなつてしまふので本当に捨てないでほしいです。

山や海、川とかによく捨てる人がいます。この夏、家族と出かけた海とか山とか道とかにゴミを見つけないで帰る日はいつきありませんでした。よく見かけるのは中身が見えないようにがんばりに閉められた袋です。中を見てほしくないなら自分でゴミ箱に捨てればいいのと思います。ゴミを道ばたに捨てたら「罰金」とかいふ看板を見るけど、捨てる人たちは知らないのかと思つてしまいます。もしかしたら、知つていても捨てているのかもしれませんが。地球が、生福がきれいでいてほしくないのかと思います。

このクリーン作戦で、生福小のまわりや生福の道をきれいできてうれしかったです。まだ、見のがしてしまつたところもあったかもしれないけど、みんなできれいにしたから、きれいな生福がもつときれいになったと思います。来年は今年よりももっともつときれいになれるといいです。

たのしかったボランティア

荒川小学校 二年 林 みよる

「これ行ってみない。」

と、おかあさんがチラシを見せてくれました。カレーづくりや手話などができるボランティア学しゅう教しつのが書いてありました。わたしは、行ってみたいなと思って、夏休みに、はじめてさんかしました。そこには、一年生から六年生までの三十人くらいの人がいきました。知らない人ばかりなので、きんちょうしました。ボランティア教しつでは、まず、自こしゅうかいをしてから、赤十字ひじょうたき出し体けん、手話やデザイナービスセンターの見学、ふくし体けんをしました。

わたしは、たき出し体けんがたのしかったです。小さいふくろにお米と水を入れて、わゴムで口をしめます。そして、みんなのふくろを大きななべに入れてゆえます。ごはんは、あつという間にできました。ゆでた後は、あつかったので、おさらに入れるのが、むずかしかったです。おいしいカレーができました。

手話では、ゆび文字の名前を教えてもらいました。「はやしみよる」ができるようになって、うれしかったです。うちに帰って、おとうさんに見せると

「すごいね」

と、びっくりしていました。あいさつの手話は時間がなくて、できなかったの、さんねんでした。

一ばんむずかしかったのは、目の見えない人の体けんです。

一人が目かくしをして、もう一人がうでをもって、へやを一しゅうしました。目かくしをしている人が、ぼうをもっているの、ちよつとがなにかに当たったら、ちよつとだけ右や左にうごきます。むずかしかったです。わたしも、声をかけて教えてもらったら、きちんとできました。わたしのおかあさんは、しやけつそんといつて、はんぶん見えないしやうがいがあります。だから、あぶないことがよくあります。あぶないときに気がついたら、すぐ声かけをして教えてあげようと思いました。

車いすの体けんは、のる体けん、おす体けんのりよう方ができました。のる時は、すわるばしよがおしりの前だと、おす人がおもたくなります。手はよこに出したり、よこのひじかけをもったりしたら、あぶないので、ふとももの上においておかないといけません。すわるばしよや手のおき方で、ちがうんだなあと分かりました。

ボランティア教しつで、いろいろなことを教えてもらいました。はじめて知ることが多かったです。来年もさんかしたいです。



ボランティアを通じて感じたこと

荒川小学校 五年 大崎 陽葵

私は、去年認知症キッズサポーターこうざを受けて、しせつでボランティア活動をしました。そのことを自由研究としてまとめたら、優秀賞に入ることができました。とても、きちよな経験をすることができました。

私が、ボランティアを始めてみようと思ったきっかけは、一人ぐらしのおばあちゃんの役に立ちたからです。残念ながらおばあちゃんは、去年の八月九日に亡くなってしまいました。今年もボランティアを通じて、少しでもだれかの役に立ちたいと思い、ボランティアをすることを決めました。

一日目は、いちき串木野市の生福という地域にある脳神経外科内のかいごしせつに行きました。久しぶりのボランティアはきんちようしました。その日は、高れい者のみなさんとお話をする活動でした。私が、

「昔は何をされていたのですか。」

とたずねたら、

「昔は三味線を弾いていたよ。」

と答えてくれました。私がお話していた方はとても明るくて、踊りが好きな方だと分かりました。お話をする前は、少しはづかしかったけれど、少しずつ楽しくなってきました。

二日目と三日目は、市来温泉センターの中にある市来デイサービスに去年に引き続き今年も行きました。今回の活動は、

折り紙制作でした。しせつのおばあちゃんといっしょに折り紙で「ホオズキ」という花を作ることにしました。私が、「よく折り紙で何か折ったり作ったりするのでですか。」とたずねたら、

「今はあまり折っていないけど、昔はよく折っていたよ。」と答えてくれました。おばあちゃんは、折り紙が得意だったので、お話をしながら教えてもらいました。「ホオズキ」の花はむずかしかったけれど、二つ作ることができました。おばあちゃんとまた作ってみたいと思いました。

いちき串木野市の高れい化率は、約三十七パーセントと全国平均の二十八・六パーセントよりも高いのです。市の担当の方が、

「かいこの人材不足も深くくだ。」
と言っていました。そのようなことから、市では、「かせともキッズ」というキッズサポーターの制度をつくり、しょう来のかいご人材となってくれることを期待した取組をすすめています。

私は、今回の経験を通して、高れい者のみなさんの優しさや人のために役立つ達成感が感じられました。一人の力は小さいけれど、多くの人々が集まれば、大きな力



になると思います。世の中が優しさであふれるようにみんなで力を合わせていきたいです。今後も機会があれば、ボランティア活動に参加して、多くの人の役に立ちたいです。

ボランティアの本当の目的

市来小学校 六年 坂口 司

ボランティア活動の目的は何か、その本当の目的が最近、僕たちの中で変わっているように思います。

最近では、ボランティア活動を何か物をもらうためや、ほめられるためにやっているんじゃないかなと感じることがあります。他にも言われないうえできないということもあります。僕もその中の一人です。僕は、先生に言われないと手助けなどがないので、気付け力や動く力が必要であると反省します。そこで、どうやったら、本当のボランティアができるかこれまでの自分の生活を振り返って、三つのことを考えました。

一つ目は、よく周りを見ることです。よく周りを見て行動すると、周りで困っている人や助けを必要としている人に気が付き、自分から進んで助けることがきつとできるはずです。勇気を出して、たくさんの人を助けたいです。

二つ目は、遠りよをしないことです。いくら周りに気付いても、遠りよをして手伝わなければ意味がありません。ですから、

そんな時は、自分からどんどん関わって、ボランティアをすることが大切だと思います。他にも手伝いたい人がいたら、協力して一緒に物を運ぶなど、やさしくしてあげたいです。

三つ目は、自分の欲を出さないということです。ボランティアは、無しの心で活動することです。

「何か物をください。」

など言ってしまう、手伝いをされて喜んでいた人も、「自分を助けてくれたのはうれしいけど、報しゅう目的だったのかな。」とさびしくなったり、悲しい気持ちになったりすることがあるかもしれません。なので、ボランティアをする時は、自分の欲をおさえてすることが大切だと思います。

このように、自分が考えたボランティアができると周りのみんながうれしくなると思います。そして、自分自身も成長していけると思います。

これから僕は、朝のボランティア活動で草取をがんばったり、身の回りで困っている人を見かけたら、進んで助けたりして、自分の中のボランティアの心をどんどん大きくしていきたいです。そしてたくさんの人を笑顔にしたいです。みなさんも一緒に頑張ります。



しよう。

ボランティアって何だろう

市来小学校 六年 町田 一晟

六年生になって担任の先生に、

「六年生になったから、一年生のお世話やボランティアを進んでみましょう。」

と言われた。それを聞いてぼくは、「よし、六年生になったし、がんばるぞ。」と思った。けれども、一年生のお世話は分かるけど、ボランティアって何をすればいいのかわからなかった。そこで、今までしたことのあるボランティアを思い出してみた。ぼくのしたことのあるボランティアは、公民館のゴミ拾いぐらいだ。このゴミ拾いは、公民館周りのゴミをみんなでする作業だ。拾ってみて分かったことは、見えているところよりも、意外とすみの方にゴミが落ちていることに気付いた。ゴミを拾った後は、きれいになって気分もすっきりした。そして、ちょっとした達成感も感じた。そうか、ゴミ拾いみたいなことをすればいいんだと思った。でも、自分から特に何もすることもなく、一学期は終わってしまった。

二学期になり、先生が、

「二学期からは、火曜日の朝にボランティアをしたいと思いま

す。」

と言った。ぼくは、いよいよ始まると思った。朝、学校に着くと、校庭に出て校庭の草取りをする。とても簡単なことだけど、朝の草取りは思ったよりも気分が乗らない。案の定、先生から「六年生として、このままでいいかな。」

と注意された。きつと、ぼくたちがだらだらしていたからそう言われたのだと思った。どこかで、「なんでぼくたちがしななければいけないのだろう。」と疑問に思っている自分がいた。先生に注意されて自分なりにボランティアについても一度考えてみた。パソコンで意味を調べると、自分から進んで行うこと、地域や困っている人々のために役立つことと書いてあった。では、今してる朝のボランティアは、だれのためにするのか。これは、みんなのためにしていると思う。次に、何のためにするのか。これは、みんなが校庭を気持ちよく使うためにしていると思う。では、これから自分はどうすればいいか。これは、自分から進んでボランティアをしていけばいい。これからのことを、自分からすること、本当の意味のボランティアになるのではないかと思う。今までの自分を振り返ってみると、こ



これらのことが足りてなかったと感じた。

これからも朝のボランティア活動が続くが、まずは、自分から進んで活動ができるようにがんばっていききたいと思う。

にん知しようになつても

川上小学校 四年 上迫田 光莉

去年の夏、お母さんから、

「じいじがにん知しようになつたみたい。」

と聞かされました。そのとき、わたしは、おじいちゃんがわたしのことをわすれてしまうのではないかと、心にはぼつかりと穴があいたような、何とも言えない気持ちになりました。大すきなじいじが、少しずつかわっていくなんて、信じたくありませんでした。

今年の夏休み、わたしは「キッズサポーター養成こうぎ」にさんかしました。高れい者やにん知しようについて学び、ボランティア活動の大切さを知るためのこうぎです。さんかした理由は、にん知しようについてもっと知りたいと思ったこと、そしてじいじに合ったせし方をしたいと思ったからです。

こうぎでは、作業りよう法しの先生からにん知しようについて教えてもらいました。にん知しようにはいくつかの種類があり、のうの細ぼうが死んでしまうことで、記おくやはんだん力

がてい下していく病氣だと知りました。たとえば、「きおくのつぽ」に大切なことを入れられなくなり、さつき聞いたことをすぐになすれてしまつたり、「今が何日か」「ここがどこか」が分からなくなつたりします。でもそんなときこそ、やさしく声をかけてあげることのできるのだと学びました。

にん知しようの人に対して、失ばいばかりしているからとおこつたりせめたりすると、ますます元氣がなくなり、しようじようが悪化してしまうそうです。ぎやくに、

「大丈夫だよ」と安心させてあげること、進行をゆるやかにすることができると聞き、わたしはじいじに対してもっとやさしくせつしたいと思いました。

わたしが家族に伝えたいことは、にん知しようの人は自分がおかしくなっていると感じて、だれよりも苦しみ、なやみ、悲しんでいるということです。だからこそ、せめるのではなく、不安な気持ちを感じ取つて、やさしく話しかけたり、耳をかたむけたりすることが大切なのです。

わたしのじいじは、とつてもやさしいです。わたしたちにおこづかいをくれたり、やりたいことを何でもさせてくれます。



わたしが長崎に遊びに行くと、近くの動物がいる公園に一しょに歩いて連れて行ってくれました。でも今年の夏休みに長崎のじいじの家に行くと、いつも同じソファにすわっていて、なんだか元気がないように見えました。それでも、わたしが話しかけたらにこにこして、返事をしてくれます。わたしは、なるべくじいじと会話をしようと思って、やさしくゆっくり話しかけました。これから先、じいじがわたしのことをわすれてしまいかも、と思うと悲しくなります。でも、にん知しうになっても、じいじはじいじ。わたしの大好きなじいじです。だから、わたしはいっぱいお話をして、たくさん思い出を作っていくたいです。

ボランティアが教えてくれたこと

川上小学校 五年 川地 未紗

川上小学校では、朝のボランティアに取り組んでいます。全校で二十四名しかいないので、みんなで協力しないと学校がきれいになりません。夏の暑いときは、草がトラックに次から次に生えてきます。みんな草をぬいても、一週間後には草がびっしり生えています。朝でも、太陽がじりじりと私たちをてらすから、汗びっしりになります。秋になると、今度はたくさんの落ち葉が校庭や学校前の歩道にちらばります。毎日毎

日、ほうきやくま手で集めても、次の日にはたくさんの落ち葉が落ちています。

私は、五年生なので、六年生のりあさんと協力して、下級生に指示をしながら、ボランティアを進めます。でも、指示がうまく伝わらなかつたり、ふざけて仕事をしなかつたりするので、ボランティアはむずかしいです。

なぜ、私たちはボランティアをするのでしょうか。もし、学校でボランティアやそうじがなかったとしたら、学校は草だらけ、落ち葉だらけになると思います。きつとごみも捨てられて、さらにきたなくなると思います。そんな学校には行きたくありません。校庭で一輪車をしたり、走り回ったりすることはできません。学校がきたないと気分が下がります。やる気が出ません。勉強や運動もできるようにならないと思います。

私たちがやっているボランティアは、自分のためでもあるし、みんなのためでもあると思います。きれいな学校で勉強や運動をすることで、成績も上がるし、運動も得意になっていくと思います。学校がきれいになって、先生たちにもほめてもらえて、一石二鳥です。ボランティアは、自分だけな



く、周りの人も笑顔にしてくれます。学校だけでなく、私たちの心もきれいにしてくれていることにも気づきました。

六月の児童集会でボランティアについて発表しました。ボランティアには、「よりよい地域や社会、世界をつくるために自分から進んで行う活動。お金のためではなく、役に立ちたいと思う気持ちから行うもの。」という意味があるそうです。ボランティアをするためには、「気づく」「考える」「行動する」の三つの行動が大切です。困っている人がいたら、その人に気づくことが大切です。次に、何をすれば、その人のためになるかを考えます。最後に、考えたことを行動にうつすことで、ボランティアになります。

来年の四月には、私は最上級生になります。下級生からたよられるリーダーになりたいです。みんなで協力しながら、学校だけでなく、みんなの心もきれいにしていきたいと思います。

はじめてのクリーンさくせん

神村学園初等部 一年 おおくほ えみ

わたしは、おばあちゃんのおうちにおとまりするのをたのしみにしていました。どうしてかという、ねこがいるからです。じぶんのおうちでは、かっこいいないので、おばあちゃんのおうちにいくと、かわいいねこがさわれます。ねこのなまえは、

「みゆ」です。くろとちやいろのしましまのねこです。とってもかわいいです。わたしをだすと、ねこのみゆは、てにちかづいてきて、すりすりします。とってもかわいいです。

おとまりのひになりました。おばあちゃんのおうちにつくと、さっそくねこのみゆをさがしました。ベッドのところで、げろをはいっていました。わたしは、びっくりしました。ばあばは、ささっとおかたづけをしました。「たいへんそうだなあ。」とこころのなかでおもいました。

ばあばのおうちでは、ごはんをたべたり、いっしょにおふろにはいったり、たのしくすごしました。ねるときに、ばあばが「あした、クリーンさくせんにいったらみない。」

といいました。わたしは、「なんだろう。」とおもったけど、きかずに、

「いかない。」

とこたえました。だって、たいへんそうだし、つかれそうだからです。ばあばは、

「じゃあおるすばんしていてね。」

といいました。おるすばんときくと、なんだかさびしくなりました。



わたしは、いそいで

「やっぱりいいかな。」

といいました。ばあばがにつこりえがおで、なにをするかを
おしえてくれました。まちのごみをみんなでひろうそうです。
やっぱりつかれそうだなとおもったけど、がんばるぞとちから
をこめました。

つぎのあさ、六じにおきました。じぶんでおきました。クリー
ンさくせんにくとおもうと、どきどきしてはやおきましたし
た。きがえて、ばあばとクリーンさくせんのばしょまであるい
ていきました。あつまったばしょには、ほうしをかぶっている
人がとてもおおかっただす。

クリーンさくせんのじかんになりました。おとなの人がかっ
たくさをひろいました。ひろいながら、ねこのみゆはどうして
いるかな、としんぱいになったけど、かえりたいとおもいま
せんでした。どんどんまちがきれいになっていくのがおもしろ
かったです。いっしょにクリーンさくせんをしている人とあい
さつもしました。あいさつをするとうれしかっただす。きもち
がよかったです。

クリーンさくせんでは、はじめはつかれるかもとおもったけ
ど、やってみると、きれいになってきもちがよかったし、つか
れなかっただす。ばあばがにつこりえがおで

「よくがんばったね。」

とほめてくれました。また、クリーンさくせんについて、まち
をきれいにしたいだす。

環境委員会の仕事を通して

神村学園初等部 五年 泉 智花

私の通う神村学園は、幼稚園から専修学校までたくさんの児
童・生徒が過ごしています。

たくさんの方がいるということは、それだけゴミも多くなつて
いきます。

神村学園の中には、リサイクルステーションと呼ばれるゴミ
置き場があります。そこに決まった曜日になると学園内のあち
こちからゴミ袋に入れられたゴミが運ばれてきます。

でも、ただ運ばれてくるだけではありません。「燃やせるゴミ」

「燃やせないゴミ」「ペットボトル」

「缶・びん」「電池」など細かく分
別するルールがあります。

今年、私は、環境委員会に入り
ました。初等部から出されたゴミ
は、私たち環境委員会が毎週月
曜日に分別されているか確認し
てリサイクルステーションに運
びます。中には、分別されてい
なかったり、洗った牛乳パックの水
が残っていたりするものもありま
す。においもするし重いゴミの時
もあって、分別作業は、決して楽



な仕事ではありません。しかし、人のためになることをしているとうれしい気持ちになるので、環境委員会に入ってよかったと思っています。

そして、これまで環境委員会の仕事をしてきて、気づいたことがあります。それは、一人一人がゴミを捨てる時にちよつと立ち止まって分別したり、ゴミを減らす工夫をしたりすることが大切だということです。

このちよつとしたことを一人一人が取り組むことでゴミ問題への解決の一步につながると 생각합니다。

環境委員会の仕事を通して学んだことをこれからの日々の生活で生かしていきたいと思っています。

ボランティアの目的

串木野中学校 三年 北園 隼也

中学校に入学してからの二年半、僕は様々なボランティア活動に取り組んできました。主に、赤い羽根共同募金やペットボトルキャップ・プルタブ回収、昨年まで行われていた書き損じはがき回収の三つの活動に力を入れてきました。そのような取組をする中で、社会に貢献する喜びと、他者とのつながりを感じることができました。

これらのボランティアをする上で、「その行動をする目的」

を僕は常に考えるようにしています。自分がしていることは、「人の役に立つことだ」「一人でも多くの命を救うことにつながる行動だ」と思うことで、自ら進んで動くことができるようになります。それが会ったこともない知らない人のためであっても、この社会に少しでも貢献できる人は自分なのだと、そう信じ続けることが、ボランティアをするときに大切なことだと思います。

以前、友達といつも遊んでいる公園に多くのゴミが散乱していることがありました。すると、友達の一部が、「公園のゴミ、全部拾おうぜ。」と言いだしたのです。他の友達もその考えに賛成し、しぶしぶ僕も作業に取りかかりましたが、いつの間にか、時間を忘れて真剣に作業をしていました。友達と協力して茂みの中にある小さなゴミまで、隅々まで、拾い集めました。六枚のスーパーの袋がパンパンになるほどのゴミが集まりました。

公園のゴミを拾いきったとき、僕はとても大きな達成感を得ることができました。友達と協力したことで団結力も生まれたような気がしました。最初は「めんどくさい」と思っていました、公園をきれいにして、環境をよくすると



いう点で、社会に貢献する喜びを実感できたことは、僕にとつてとてもよい経験になったと思います。

これらのボランティアを通して、僕が学んだことが二つあります。一つ目は、人と人とのつながりについてです。ボランティアをするときは、必ず他者とのつながりがあります。一緒にボランティアに参加し、協力し合う人とのつながり。ボランティアのおかげで笑顔になってくれる人、命が救われる人とのつながり。こうした活動を見聞きすることで、ボランティアに積極的になってくれる人とのつながり。多くのつながりがあると思います。これらの「他者とのつながり」は、ボランティアで社会をよりよくする上で、とても重要な役割を担っている。と僕は考えています。

二つ目は、ボランティアは、人のためだけでなく、自分のためでもあるということです。ボランティアをすると人に感謝され、自分もうれしくなる。このように、自分がした行動により、自分にも利益が生じ、達成感や幸福感を得ることができ、自分も笑顔になります。

僕は今後、社会のためや人のため、そして自分のためにも、ボランティアができるような人で在り続けたいと思います。

ボランティアの意義

串木野中学校 三年 中野 友葵

「明日は学校の資源ゴミ回収があるから。」

ある夜、父が言った。私はその時、「めんどくさいな」と思った。休日なのにわざわざ早起きしなければならない上に、とにかく興味がなかったからだ。

私たちの学校では年に二回、生徒と保護者、PTAのみんなで協力して、資源ゴミの回収を行っている。

次の日、まずは家の中の新聞紙をまとめるところから始まった。しかし、これがなかなか難しい。たくさん新聞紙を重ねているので、ひもでまとめるまでにすべってくずれてしまう。おまけに重たくて、うまく扱えないのだ。しかし、隣で同じようにまとめている父を見ながらしてみると、少しずつコツがつかめてきた。悪戦苦闘の末、新聞紙をまとめたひもを結ぼうとしたとき、

「ひもは角で結ぶと新聞紙がしつかりまとまって持ちやすくなるよ。」

と父が教えてくれた。実際に角で結んでみると、しつかりとまとまって、置いても持ち上げて安定していた。どこでどう結べば安定するかなんて、普通に生活しているだけでは考えることとすらしらない。だから、今回の経験を通して、新しい知識を得ることができてよかったと思った。

また、「新たな経験すること、知らなかったことを知るチャ

ンスが増える」ということも学ぶことができた。

古新聞をまとめた後、家の資源ゴミと地域の方の資源ゴミをいくつか集めてから、学校へ向かった。

学校では中学生と保護者の方々が全員で協力しながら作業をしていた。そして、誰もが周りを見ながら動いていて、お互いにお互いを思いやりながら動いていた。自然と思いやりの行動をしているのを見ているだけで、うれしく、ほっこりとした気持ちになった。周りを見ながら行動できることがすごいなと思う、私たちの学校で自慢できることのひとつだなとも誇らしい気持ちになった。

資源ゴミ回収が終わった後、回収された資源ゴミはどうなるのか、ふと気になり、調べてみた。新聞紙は段ボールやトイレレットペーパーにリサイクルされ、一升瓶は新しく中身を詰めてリユースされる。そして、私が何より驚いたのは空き缶だ。アルミ缶は自動車の部品や建材に、スチール缶は鉄骨や自動車のボディに生まれ変わるらしい。

資源回収によって、捨てられるだけだったゴミが、新たな資源に生まれ変わり、私たちの生活を豊かにしてくれる。そう実



感した。

今回資源ゴミ回収に参加して、人と人のつながりの温かさや資源ゴミ回収を行う理由など、普段の生活の中では知ることができないことを知ることができた。これからも様々なボランティア活動に積極的に参加して、学びの場を広げていきたいと思う。

誰かのためにできること

串木野西中学校 三年 池田 樹里

私は第五十四期生徒会長として活動しています。そして、令和八年度には、串木野市内の中学校が合併するため、今年度は西中最後の年です。

約一年間、「過ごしやすい学校にしたい」という思いを胸に生徒会長に就任しました。みんなが過ごしやすい西中にするため、三つのことを大切にしています。一つ目は朝のあいさつ運動です。校門に立ち、西中独自のストップ・スマイル・先手を表す「三Sあいさつ」を意識したあいさつを行うことで、気持ちの良い学校生活をスタートすることができそうです。今年度はクラスの代議員を中心とした「あいさつし隊」を結成し、あいさつへの意識を学校全体で高める取組みをしました。「あいさつ」は互いを知るきっかけとなるものだと思います。一人一人が

「あいさつ」を大切にするのが「過ごしやすい」学校をつくる基盤となっています。

二つ目は西中ポストです。西中ラブという紙に書き西中生活での悩みや要望がある場合、投函することができます。また、西中の良いところや友達の良いところも書くことができ、いろいろな生徒のことを知ることもできます。このように意見をすい上げることができるので、思いに寄り添った活動を行うことができます。

三つ目は、ペットボトル・プルタブ回収と募金活動です。ペットボトルキャップはワクチン、プルタブは車椅子に変わるため、常呼びかけを行っています。また、赤い羽根募金に加えて、夏休みには製作活動を企画し、生徒が作ったものを文化祭で販売し、その売上金を全て被災地に寄付しています。自分たちのことだけでなく、周りに目を向けて行動をすることを大切にしています。

この三つの柱を中心に他にもさまざまな活動を行っています。ラストイヤーとなる西中ですが、伝統、歴史を大切にした上で、様々なことに関心をもち、行動できる学校を目指しています。最後まで盛り上げられるようにがんばりた



いです。

西中のボランティア

串木野西中学校 三年 西川 友稀

串木野西中学校では、「5秒礼」や「3Sあいさつ」、そして「ペットボトルキャップ・プルタブ回収」に取り組んでいます。私は、これらの活動を通して、あいさつや礼儀の大切さだけでなく、人の役に立つ行動のすばらしさも学びました。

まずは5秒礼です。ただ頭を下げるのではなく、5秒間しっかりと礼をするのですが、最初は5秒という時間が長いと感ずることが多くありました。しかし、続けるうちに、感謝の気持ちを込められるようになりました。形だけでなく、心をこめることが大事だということが分かりました。

次に3Sあいさつです。これは、「STOP・SMILE・SENTE」を行うあいさつを指します。中学生に入ったばかりの頃は、相



手からのあいさつを待つことが多かったのですが、今では自分から進んであいさつをするようになりました。相手の笑顔をみることができるので、とてもうれしい気持ちになります。あいさつには、人と人との距離を縮める力があると感じました。

最後はペットボトルキャップ・プルタブ回収についてです。小さなものでも、みんなで協力し、集めることで大きなものへと変化します。回収活動で、環境を大切にする心や、人の役に立つ喜びを学ぶことができました。

私はこれらの活動を通じて、学校という場所は勉強を学ぶだけでなく、礼儀や思いやりを實踐できる場でもあると思いました。これからも5秒礼や3Sあいさつ、回収活動を続け、人の役に立てるような人間になりたいです。

羽島をきれいに心もきれいに

羽島中学校 二年 赤岩 路唯

七月のスマイル貯金のテーマが『羽島中ラストイヤーだからこそ力を入れたいことは?』でした。スマイル貯金とは、羽島中をさらに活気溢れる学校にするためのボランティア活動の一つです。最近楽しかったことや頑張りたいことなど月ごとにテーマを設定し掲示板に共有をします。そこから会話が生まれ笑顔が広がるきっかけを作るという取り組みです。

このテーマに対して私は「道路清掃や海岸清掃など積極的にボランティアに参加する」という目標を立てました。理由は、ボランティア活動を通して様々な人とコミュニケーションを取りつながりを広め、道路清掃や海岸清掃のボランティアを通して地域がきれいになっていく楽しさを実感したいと思ったからです。

まず、道路清掃の活動は、生徒会本部が中心となり、毎月第四水曜日の放課後に二十分程度、学校周辺の道路や薩摩藩英国留学生記念館の駐車場を掃除します。道路にはたくさん木の枝や葉っぱが落ちています。それらをほうきで掃き集め、袋にまとめて処分します。短い時間の活動ですが、終わったあとに通学路がきれいになるとすっきりして気持ちが良いです。また、地域の方々から「ありがとう」と声をかけていただくこともあり、とても嬉しく感じます。私は四月から毎月欠かさずこの道路清掃に参加しています。ボランティア活動をきっかけに、少しずつですが普段あまり話さない友達や先生方など話す機会が増えました。掃除の合間に声をかけ合ったり、作業の分担の話をしたりする中で、協力することの大切さも実感しまし



た。

次に海岸清掃は、一学期と二学期に一回ずつ学校の前に広がる羽島の海岸を掃除しました。学校から見る海はとてもきれいですが、実際に浜辺に降りてみると、ペットボトルやプラスチック片、ガラスの破片など、たくさんゴミが落ちていました。ゴミを拾いながら、もしこれらが海に流れ出してしまえば、海が汚れるだけでなく、魚や鳥などの生き物たちが誤って食べてしまう危険性があると思いました。海岸清掃は、羽島の海をきれいに保つだけでなく、海の生き物の命や自然環境を守ることにともつながっているのだと気づきました。掃除を終えて海を眺めたとき、最初よりもずっときれいになった海岸を見て達成感がこみ上げてきました。

これらのボランティア活動に参加して感じたことは道路や海がきれいになると「また参加したい」と思えることです。ゴミや落ち葉の清掃は大変ですが、作業が終わりきれいになった道路や海岸を見ると達成感があり、次も頑張ろうという気持ちで沸いてきます。羽島中ラストイヤーの今年、ボランティア活動を通して地域への感謝の気持ちを忘れず、仲間と協力しながら笑顔の輪をさらに広げていきたいです。

伝えたい気持ち、届いた「ありがとう」

羽島中学校 二年 黒木 悠依

「羽島中閉校だつてよ」ある日父に告げられました。私は、最初「どうせ嘘でしょ」と思っていました。しかし、周りの友達や学校の先生も同じことを言うのでだんだんと現実味が増してきました。そのとき私は、今までの学校生活を思い出し、残りの一年間をどのように過ごすか考えました。様々な考えが浮かびましたが、私は生徒会副会長を務めていることもあり、生徒会で今までお世話になった地域に恩返しができないかと考えました。そこで、生徒会のボランティア活動の一環として、地域の方々へ感謝の気持ちを伝える「感謝カード」を作ることになりました。生徒一人一人が地域への思いをメッセージを手書きし、地域の方々がよく訪れる交流センターに掲示をするという活動です。掲示だけでは地域の方々にはメッセージが届かないかもしれないので、交流センターの方や先生方に協力をいただき、地域放送として感謝カードの一部を読み上げられることも行いました。活動後、地域の方々に会う際に「ありがとう」や「嬉しかった」などといった感謝の言葉をいただきました。直接言ってもらえる「ありがとう」はとても嬉しく私の勇気とパワーに繋がりました。そしてもっと地域へ感謝を伝えたい、学校生活を楽しく盛り上げたいと思いました。

私は、自分の気持ちを言葉にするのが得意ではありません。話しかけたいと思っても、「どう思われるかな」「怒られたら

どうしよう」と考えてしまい、声をかける勇気が出せません。たくさんの方の前で発表するのも苦手で、視線を感じるだけで心配になります。「うまく話せなかったらどうしよう」「間違ったらどうしよう」と不安ばかりが先に立ち、自分の思いをうまく伝える自信が持てません。そんな私にとって、生徒会副会長としての「感謝カード」の活動は大きな挑戦でした。自分の意思をどう表現すればいいのか悩んだり、生徒会の仲間と意見を交わす中で戸惑ったりすることが何度もありました。しかし、活動を進める中で少しずつ考えが変わり、うまく話せなくても、時間がかかっても、気持ちを込めて行動することですぐに思いを伝えることができると思えるようになりました。

カードの言葉一つ一つに時間をかけ、放送の原稿も何度も書き直しながら、一生懸命取り組みました。その姿を見た、地域の方々が「ありがとう」と言ってくれたとき、「伝わったんだ」と思い嬉しくなりました。

この経験を通して、私はやること一つ一つに時間をかけてでも、丁寧に最後までやり遂げることが一番大切だと学びました。そして、最初は学校や地域のために行っていた活動でしたが、いつの間にか



自分自身の成長にもつながっていました。これからも地域のあたたかさを忘れずにボランティア活動に取り組んでいきたいです。

ありがとう、私の学校

生冠中学校 三年 東 美末

私とボランティア活動の出会い、正直、最初はとてもめんどくさいものでした。毎朝の挨拶運動や朝清掃を「やらなきゃいけないからやっている」という感じでした。

でも、そんな適当な気持ちを私たちの学校の「閉校」をきっかけにすごく大切なものになりました。

私たちの学校、生冠中学校は、朝の活動をとっても大事にしています。朝の挨拶運動では、「生冠中学校あいさつ四か条」を守り、生徒はもちろん、地域の方にも元気を届けられるような挨拶をしています。挨拶で大切なことは、「コミュニケーション」と「笑顔」だと思います。朝の挨拶をすることで、一日が気持ちよくスタートすることができます。

次に、生冠中学校で取り組んでいるボランティア活動は、朝清掃です。毎朝、学校の周りの落ち葉を拾ったり、花の水やりをしたり、草を抜いたりしています。先生方も毎朝、手伝ってくれます。朝から学校の周りをきれいにすることによって、

同時に自分の気持ちもきれいにしてくれます。特に、行事の際は、先生方に指示される前から自分たちで考え、動き、学校の周りをきれいにしたり、行事で使う道具や会場の準備を、みんなで協力してやっています。そこも、生冠中学校のすごく素敵なところだなと思います。

また、毎年、学校行事や授業でお世話になっている地域の方に、マリーゴールドなどの花苗プレゼントも行っています。毎年、一年間の感謝を込めて手渡しています。

そして、十月からのボランティア活動は、赤い羽根募金に取り組んでいます。校内で毎日放送をして呼び掛けをしたり、先生方に協力をもらったりして、一円でも多く赤い羽根募金に寄付ができるよう頑張っています。一人でも多く、困っている方の役に立つことを願って活動しています。

もうすぐで、生冠中学校は閉校してしましますが、閉校とボランティア活動を通して、たくさんのことを学びました。それは、「人の役に立つ」という表面的な意味を超えて、「行動すること、他の誰かの心も動かしたり、温めたりする」ということです。

残り五か月で生冠中学校は閉校



を迎えます。でも、私たちの挨拶で交わした地域の方々との笑顔、学校の周りを一生懸命清掃したこと、困っている人のために頑張って集めた募金活動は決して消えることはありません。生冠中学校の最後を最高な形で迎えられるように、残り五か月ボランティア活動をしつかり取り組んでいきます。

今までの活動を振り返って

生冠中学校 三年 吉木 歩花

「来週、認知症サポーターの人たちが学校に来てくれます。」そう言われたとき、私は認知症サポーターの人たちって誰だろうと思いました。その頃は認知症についての理解が少なく、楽しそうと思っていました。ですが、認知症サポーター講座を受けて私は、認知症への理解が変わりました。

私は今中学三年生です。私の学校では、一年生の総合学習で認知症サポーター養成講座を受けました。これは、実際に認知症サポーターの方に来ていただき、お話を聞くという活動です。認知症についての絵本の読み聞かせをもらったり、グループを作って、おばあちゃんにどのように話しかければいいかという劇をしたりしました。読み聞かせをもらったときに友達は、

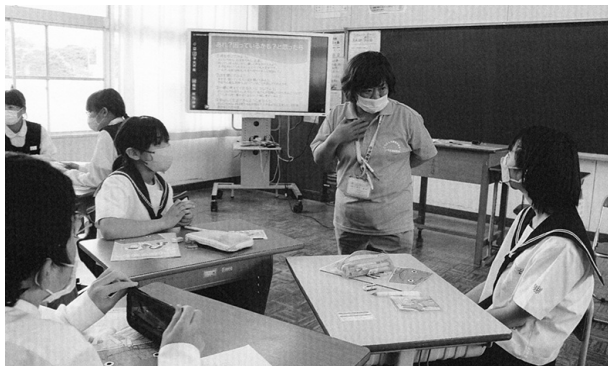
「急におばあちゃんが認知症になってしまったのに、子どもは

優しく対応していてとても感動した。」と言っていました。

私達は、このサポーター養成講座で、認知症ハウスにいるおじいちゃん、おばあちゃんが作ったオレンジ色のロバを頂きました。その時に私は、なぜオレンジ色のロバなんだろうと思いました。そこで、認知症サポーターの方に聞きました。すると、ロバはオレンジ隊長といい、「認知症サポートキャラバン」のマスコットであり、急がず一步一步着実に進むことを象徴するキャラクターです。ロバと

オレンジ色の意味を知り、サポーターとして何かできることはないかと考え始めました。

また、認知症には関係のないことですが、私達は十月に、四年ぶりに行われた敬老ふれあい活動に参加しました。小学生の頃にも行っていました。コロナ禍の影響で四年間実施されていませんでした。活動内容としては、体育館では「フリスビー」や「輪投げ」などのニュースポーツ、校庭では「グラウンドゴルフ」などを行いました。中にはこの生冠中学校の出身者もいて、昔の中学校のお話なども聞きました。「コミュニケーション活動」「知的活動」を積極的に行う人は認知症予防につながる



ると近代の研究で発見されました。このような活動をこれからも続けて少しでも「認知症の進行」や「認知症予防」につながればいいと思います。

私達は一年の文化祭で認知症サポーター養成講座で学習したことを活かして劇もするということに決まりました。私達はアラジンと魔法のランプをベースにして「魔法のランプ」という劇をしました。劇の中で主人公はランプの精に四つの願いを叶えてもらうことになり、認知症で働いている人のことや認知症について知ってほしいとランプの精にお願いし、街に認知症への理解が深まったという劇をしました。沢山の人の理解が深まると思います。これらの取り組みや活動で少しでも多くの人が認知症予防につながり、お年寄りが過ごしやすい社会になってほしいです。

ボランティアについて

市来中学校 三年 内田 あかり

ボランティアは、給料や見返りなく行われる行為だ。そんなボランティア活動を私の通う市来中学校では毎朝行っている。毎朝八時前にはほとんどの人が登校して掃除を始める。三年間も毎朝ボランティアを行っていると、やはり「いきたくない。どうしてわざわざ早く学校へ行って掃除をしなければならな

いのか。」と思うことがある。おそらくこう思っている人も少なくないだろう。しかし、私はこれまでの三年間、遅刻はほとんどせず毎朝掃除を続けてきた。それには少しの理由がある。

私の住む地域は、学校から少し離れているため自転車で登校している。その分他の人よりも少し登校に時間がかかる。そんな場所に住んでいても、私は毎朝早い時間に家を出てボランティアサービス活動（以下VS活動）の三十分前の七時三十分ごろには学校につくようにしている。私は朝起きるのはあまり好きではない。寝ることが好きだからもっと寝ていたいくらいだ。だから起きるときはいつも憂鬱になる。しかし、そんな憂鬱な気分をしてまで起きるからこそ、朝のあの涼やかな空気を感じることができなのだ。人のいない静かな教室の空気も私のお気に入りの時間の一つだ。私はこの後にあるVS活動はあまり好きではなかった。しかし朝に掃除をすると、朝の空気がさらにきれいになったような気分になることに気づいた。この達成感を感じてから、毎朝のVS活動が少し楽しくなった。これが私がVS活動を毎日している小さな理由の一つだ。

ボランティアには私が行っているような掃除のほかにも募金活動



やゴミ拾いなど多岐にわたる。規模が大きいものから小さいものまですべてがボランティアだ。そのボランティアに優秀などない。どんな些細なやさしさでも、それはあなたが行ったボランティアだ。そう考えると、あなたもたくさんのボランティアをしたことがあるのではないだろうか。募金活動やゴミ拾いなどは、「誰かのためにしている」と考えている人も多いだろう。たしかに、どこかの誰かのためにもなる。しかし、そのボランティアは「自分のため」にもなる。「情けは人のためならず」この言葉を聞いたことはあるだろうか。これは情けをかけても人のためにならないという意味ではなく、いい行いは、巡り巡ってやがて自分のところへ返ってくるという意味である。この言葉のようにボランティアのようにいい行いは、「自分のため」にもなる。

これはあくまで私の考える話だ。こんな話を聞いても、ボランティアを進んでやろうと思うような人は少ないと思う。しかし、この作文で少しでも「やりたくない」と思う気持ちを少なくすることができればうれしい。あなたのその少しの優しさを自分のためにも行動に移してみてはどうだろうか。

松寿園訪問を通して

市来中学校 三年 浜田 真子

私は、生徒会の活動の一つとして、「松寿園」という老人ホームを訪問し、施設の方々と交流しました。この活動は、市来中学校が独自に行っており、生徒会の仲間と一部の生徒が参加しました。普段の学校生活ではなかなか接することができない高齢者の方々と触れ合うことができ、とても貴重な体験になりました。

松寿園に着き室内に入ると、利用者みなさんが笑顔で拍手と共に迎えてくださいました。最初は緊張していた私たち生徒の緊張も一瞬にしてほぐれました。最初に行った活動は、「クイズ・なぞなぞ」です。「富士山がまたがっている県はどこでしょう。」などのクイズを出すと、みなさん一生懸命考えながらも、答えが分かった時には笑顔になり、会場がとても明るい雰囲気になりました。ヒントを出しながら、みんなで考えることで、世代をこえて生徒も利用者の方々も一緒に楽しむことが出来ました。知ることや考えることの楽しさをみんなで感じられた良い時間だったと思います。次に行ったのは「風船バレー」でした。車イスの方もいたので、イスに座りながら机の上で風船を打ち合いました。シンプルな遊びでしたが、風船がふわふわと飛ぶ度にみんなが笑顔になり、自然と笑い声が広がっていききました。私も一緒に風船を追いかけているうちに、楽しさというものは年齢をこえて共有できるものだと感じ

ました。その後は、利用者の方々の肩たたきをしたり、お話をしたりして過ごしました。肩たたきをしている時、「気持ちいいね」「ありがとう」と言ってくくださったことがとても印象に残りました。お話をしている中で、「若い人と話すのは嬉しい」と言ってくださいる方もいて、たくさん交流ができて良かったなと思いました。また、私自身も色々な話を聞かせていた当中で、市来での伝統や地域の方々の昔の様子など、自分の地域のことに触れることができました。

この活動で私は、「人と人との繋がり大切さ」を改めて感じました。普段の学校生活では、同年代の友達や先生方と過ごす時間がほとんどですが、世代をこえて交流することで、自分の考えの幅が広がりました。話をすることや笑顔を交すことなど、小さなことでも元気の源になる力があると気づきました。

これからの学校生活では、困っている人がいたら、自分から声をかけてみたり、地域の行事などにも積極的に参加したり、松寿園で学んだことを生かしていきたいです。そして、人との関わりを大切にしながら、周りの人を笑顔に出来るような行



動を心がけていきたいです。松寿園で実感した「ありがとう」という言葉の重みを忘れず、これからも人との繋がりを大事にできる自分でありたいです。

ボランティア活動を経て学んだこと

神村学園中部部 三年 室屋 潤奈

私がボランティア活動に興味を持ったのは、学校や地域の人たちのために自分も何か役に立ちたいと思ったことがきっかけです。

私たちの学校はボランティア育成事業協力校として、地域と協力しながらさまざまな活動を行っています。

その中でも特に印象に残っているのが、プランターづくりのボランティア活動です。この活動では、ただ花を植えるだけでなく、プランターのデザインから自分たちで考えました。班ごとに話し合いながら「見た人が明るい気持ちになるように」「優しさや感謝の気持ちが伝わるように」など、それぞれの思いを込めてデザインを考えました。完成したデザインをシール用紙に印刷してプランターの側面に貼ると、世界に一つだけのプランターが出来上がりました。模様や色の組み合わせにも個性が表れ、見ているだけで心が温かくなるような作品ばかりでした。次に、どの季節でも長く咲き続ける花を選び、

心を込めて植えました。土の固さや水の量を調整しながら、苗がしっかり根づくように丁寧に作業を進めました。活動中は互いに声をかけ合い、進行状況を班ごとに確認しながら協力して取り組みました。最初は手際が悪く時間もかかりましたが、班の仲間と助け合ううちに次第にコツをつかみ、作業のスピードも早くなっていきました。

これから完成したプランターは、職場体験学習でお世話になった福祉施設や保育園などの事業所に届ける予定です。施設の方々が喜んでくれる姿を思い浮かべながら、みんなで心を込めて準備を進めています。

この活動を通して、私はボランティアとは特別なことではなく、相手を思う気持ちを形にすることだと感じました。小さな思いやりでも、行動に移すことで誰かの笑顔につながるということを学びました。これからも、自分にできることを見つけて続け、地域の人々の役に立てるよう努力していきたいと思っています。



感謝の気持ちを伝えること

神村学園中等部 三年 池田 琉壺

神村学園では、中学二年生の職場体験でお世話になった方々に、お花を渡す活動をしました。

まず、お花の植え替えを行いました。初めてお花を根ごと優しく掘り返し、プランターに土を移します。そして丁寧に植え替えます。そのときに、枯れてしまっているお花は切り取り、色鮮やかなお花を残しました。水やり係の人が毎日欠かさず水やりをしてくれたため、枯れてしまったお花は少なく、綺麗なお花をたくさん届けることができました。

次に、私たちは感謝の気持ちを伝えるために、どんな工夫をしたらいいのだろう、と話し合い、「ありがとうございます」という文字とイラストをシールにしてプランターに貼ることにしました。生徒会執行部がシールを貼る活動をしていたところ、通りすがりの中学二年生が「僕たちも手伝います!」と言い、手伝ってくれました。私は職場体験での経験が普段からの生活に良い影響を与えているなと思い、より感謝の気持ちが込められてきました。シールを貼る作業は、空気が入らないようにすることと、斜めに貼ってしまわないようにすることに気を付けました。みんなで作業を分担し、一生懸命に取り組むことができました。

最後に、お世話になった事業所の方々に、お花を渡しに行きました。「ありがとうございます。」の言葉と一緒にお花を渡

すと、どの事業所の方も笑顔で受け取ってくれました。

そして、私は嬉しかったことがあります。去年、私が職場体験でお世話になった事業所の方に、お花を渡しに行った時のことです。私は、事業所の方は私のことを覚えていないだろうなと思っていました。しかし、事業所の方は、私を見て「去年来てくれたよね!」と声をかけてくれました。私はビックリしました。そして、去年、お礼を伝えるために送った手紙を飾ってくれているということも伝えてくださりました。

今回、私は感謝を伝えるということはとても大切なことで、人と人とを繋ぐものを頑丈にするのだということを知ることができました。これから、感謝の気持ちを伝えることを大切にしていきたいです。



愛の奉仕に触れて

串木野高等学校 二年 坂口 暁暉

今回のワークキャンプで特別養護老人ホーム潮風園さんを訪れた経験は、私にとつてとても大切な出来事になりました。施設に足を踏み入れる前は、「静かで少し暗い場所なのかな」となんとなく思っていたけれど、全然そんなことはなく、雰囲気は想像以上に明るくて驚きました。

施設内を案内していただいていたときに、一つ一つの部屋が利用者の「家」のようになっていたのを見て感動しました。家具や写真が置かれ、個人の生活がそこにあつて、暮らしやすそうに感じました。そして潮風園さんの方針として「してあげるのはなく、させていただく」という「愛の奉仕」があり、職員さん全員が愛の奉仕の精神で接している姿を見て、私も見習おうと思えました。

利用者の方々と交流する中で、実際に認知症の方と接し、話が途中で途切れたり、同じことを繰り返し聞かれたり、正直どう答えればいいのか戸惑いました。でも、職員さんが他の認知症の方と接しているのをみると、決して否定はせず、「まだ順番がきてないだけだから待ってね。」と言ってスムーズかつ認知症の方がストレスを感じない言い方をしている、プロだなと思いました。

レクリエーションでは高齢者や視覚障がい、車椅子の体験をさせてもらいました。体に重りをつけて歩いたり、視界を

遮られた状態で部屋の中を一周するだけでもとても怖かった。車椅子に座ったときも人の支えがなければ、普段何気なくできていることが実はこんなに難しいのかと強く実感しました。また、自分がサポートする立場になったときは「右に曲がります。」だけだと情報が足りず、右に行きすぎたり、曲がりきれないことがあります。高齢者の方だと肩を軽く触ってから話かけないと声が通らないこともあり、介護する側もとても大変なんだと身をもって実感しました。

活動を終えて振り返ると、自分の生活についても考えさせられました。普段は学校や友人との付き合いに夢中で、家族と向き合う時間が少なくなっています。でも、家族との何気ない会話や一緒に過ごす時間がかけがえないものだ気づきました。これからは身近な人との時間も大切にしたいこうと思います。

今回のボランティアを通して、高齢者や視覚障がいを患っている方との接し方を知れ、単なるボランティア以上の経験になりました。正直、最初は「どんな作業をするんだろう。」という軽い気持ちで参加しましたが、今はこの体験が自分の生き方や人との関わり方を見直すきっかけになったと断



言できます。

ワークキャンプを終えて

串木野高等学校 二年 大六野 瑠花

潮風園さんでの二日間の高校生ワークキャンプを通して、将来の一つの選択肢として多くのことを経験することができました。私は将来看護・介護など医療関係の仕事に就きたいと思っているので、実際に体験したいと思いこのワークキャンプに参加しました。二日間を通して主に三つの活動をしました。

まず、高齢者・視覚障害・車椅子体験をしました。高齢者体験では、手足に重りを付けたリ、ゴーグルをして実際に歩いてみました。自分で体験してみても、視界が狭くぼやけてしまったり、体が重くなるため思うとおりに動かせないということを感じました。また補助する際は、補助する側も離れすぎず、補助が必要な人に合わせて支えながら声掛けすることが大切だと知ることができました。私はぶつからないよう要介助者と距離をとってしまうことがありました。そのため、これから先支える機会があったら離れすぎないよう改善していきたいと思いました。

次の活動は、認知症サポーター養成講座を受けました。改めて、認知症は誰でもなる可能性がある症状であり、私たちに

とっても身近な病気の症状だなと感じました。講座を聞いて、原因となる病気などを初めて知ることも多かったです。認知症のことを全て理解するのは難しいため、市が行っている認知症サポーター養成講座に参加し今後に活かせるように少しずつ理解していきたいと思いました。

最後に入居者様とレクリエーションなどのふれあいをしました。実際にふれあいをしてみても、高齢の方々は耳が聞こえにくいといった声の大きさや話すスピードが大

切だと思いました。また、後ろから声をかけるのではなく前から顔を見て話すことでお互いに安心して話すことができるんだと感じることができました。会話をしていく中で、相手の方が話を聞いているのか不安にならないよう話を聞きながら相づちをうつことも会話する中で一つのポイントだと気づくことができました。レクリエーションをしていく中でみんなで体を使って動くことで、入居者さんや職員の方々も笑顔で楽しんでおり幸せな時間を過ごすことができました。私が一番潮風園さんで印象に残ったことは、ユニットケアとなっていることです。お家のように玄関やリビング、住所まであったり、



職員のみなさんの服装が私服だったり、入居者の方が暮らしやすい生活環境が整っているのがいいところだと感じました。この二日間で、高齢の方々への接し方や認知症についてなど多くのことを学ぶことができました。今回学んだことを活かして、将来についてもしっかり考えていきたいと思いました。とても貴重な体験ができて良かったです。また来年も参加したいです。

ワークキャンプで学んだこと

串木野高等学校 三年 中村 温仁

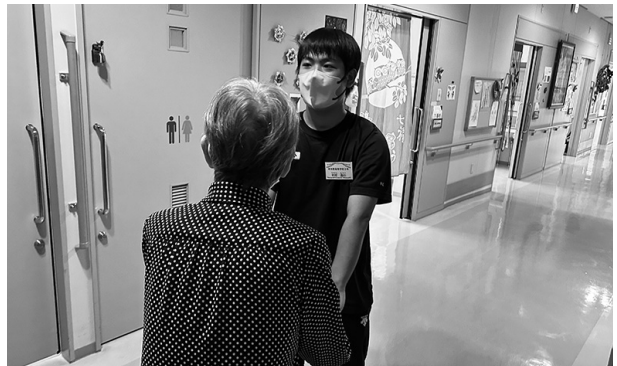
私は今年の夏、高校生ワークキャンプに参加し、特別養護老人ホーム潮風園で活動しました。参加は今回で二回目になります。昨年の経験が強く印象に残っていたため、今年も挑戦したいと思い、参加を決めました。

活動内容はレクリエーションの手伝いなどです。昨年は緊張してうまく話しかけられませんでした。二回目の今回は自然に声をかけることが出来ました。入居者の方が安心して過ごせるように、ゆっくり耳を傾けることの大切さを改めて実感しました。

また、介護職員の方々が働く姿を近くで見て、一人一人に合わせた細やかな対応が求められることを知りました。介護の仕

事には体力だけでなく、思いやりや忍耐力も必要であり、その奥深さに気づくことができました。

二回目の参加を通して、前回よりも成長した自分を感じました。人と向き合う姿勢や相手を思いやる心を大切に、今後の学校生活や将来に生かしていきたいと思います。



～ 小学生ボランティア学習教室 ～

1. 目 的

高齢者とのふれあい交流を通して高齢者や障がいのある人に対する理解や
いたわり、またボランティア活動の意義や楽しさを認識し、思いやりのある
心優しい児童を育成しようとするものです。

2. 日 時

令和7年7月22日（火） 9：30～14：30（受付9：00）

3. 会 場

串木野高齢者福祉センター

デイサービスセンター

4. 福祉体験対象者

いちき串木野市内小学生 32名

5. 体験内容

- ①オリエンテーション
- ②非常食炊き出し体験
- ③手話講座
- ④デイサービスふれあい交流
- ⑤昼食
- ⑥福祉体験（視覚障害者体験・車いす体験）
- ⑦まとめ（感想や体験のふりかえり）



令和7年度 小学生ボランティア学習教室 令和7年7月22日（火）



いちき串木野市社会福祉協議会

～ 高校生ワークキャンプ ～

1. 研修目的

高等学校の生徒を対象に、施設における体験学習を通して、社会福祉への理解と関心を深めるとともに、豊かな人間性の形成をはかり「共に学び、共に生きる」社会連帯の意識の高揚と「思いやりの心」を育てることを目的とする。

2. 期日及び施設名

期 日 令和7年7月26日（土）～7月27日（日） 1泊2日

施 設 特別養護老人ホーム「潮風園」（いちき串木野市別府 3570）

3. 参加者

串木野高等学校生

4. 日 程

7月26日（土）一日目

10：00 開講式・オリエンテーション・写真撮影

10：30 高齢者・視覚障害・車いす体験

11：30 昼食・休憩

12：30 認知症サポーター養成講座

13：30 休憩

14：00 レクリエーション・入居者とのふれあい

15：30 施設概要の説明と施設案内

16：00 入居者とのふれあい

17：30 夕食

18：30 振り返り

19：30 休憩・入浴

23：00 消灯・就寝



7月27日（日）二日目

7：00 起床

8：00 朝食

9：00 振り返り

10：00 ふれあい体験（中止）

11：00 反省会（総まとめ）（中止）

11：30 休憩

11：45 閉講式

12：15 昼食

12：45 終了



令和7年度 高校生ワークキャンプin潮風園

令和7年7月26日(土)～27日(日)



いちぎ串木野市社会福祉協議会

